スタジオジブリ第1回洋画アニメーション提供作品

KIRIKOU

小さな男の子の大きな好奇心が世界を変えた。

キリクと魔女 ET LA SORCIÈRE

原作・脚本・監督　ミッシェル・オスロ
音楽　ユッスー・ンドゥール（メイン・テーマ曲 東芝EMI）

Une coproduction LES ARMATEURS / ODEC KID CARTOONS / MONIPOLY / FRANCE 3 CINEMA / R.T.B.F. (Télévision belge) / STUDIO O / TRANS EUROPE FILM / EXPOSURE avec le soutien de : Fonds Eurimage du Conseil de l'Europe, Centre National de la Cinématographie, Centre du Cinéma et de l'Audiovisuel de la Communauté Française de Belgique, Procirep, Agence de Coopération Culturelle et Technique (ACCT), Programme Media de l'Union Européenne et Cartoon. Avec la participation de : CANAL +, Pôle Image d'Angoulême, Fonds National de Soutien à la Production Audiovisuelle (Luxembourg)

日本語吹替版　浅野温子　神木隆之介

原作 ミッシェル・オスロ ／ 翻訳 高畑 勲（徳間書店刊）● 日本語版翻訳・演出 高畑 勲

後援 フランス大使館文化部 ● 推薦 (社)日本ユネスコ協会連盟 ● 協力 ローソン
提供 スタジオジブリ・日本テレビ・博報堂・ニューセレクト ● 配給 アルバトロス・フィルム

©Les Armateurs / Odec Kid Cartoons / France 3 cinéma / Studio O / RTBF / Monipoly / TEF / Exposure

なぜ？　どうして？

KIRIKOU
キリクと魔女 ET LA SORCIÈRE

悪者退治をしない英雄　河合隼雄（文化庁長官・臨床心理学者）

主人公のキリクは現代の英雄である。この映画は現代の英雄に関する神話を見事に語っている。心と無関係の真実を伝えるためには、自然科学は極めて優れているが、神話は心の深層の真実を語るものである。

魚を釣ったとき、その大きさや重さは、科学的に計測することにより、数字によって正確に記述できる。しかし、そのときの驚きや喜び、心の躍動を伝えるためには、数字を無視し、身ぶり手ぶりで「物語る」ことが必要だ。物語ることによってのみ、心の真実を伝えることができるのだ。

キリクの誕生は、まさに英雄にふさわしい。キリクはお母さんのお腹のなかから、「母さん、ぼくを生んで!」と話かけて驚かせる。誕生から命名までの一連のキリクの行動は映画で観ていただくとして、要するにその特徴は「自立」の一語につきる。

そんな馬鹿な、などという必要はない。生まれてすぐに「天上天下唯我独尊」と言った赤ん坊もいるし、桃から生まれてすぐに、鬼退治に出かけた赤ちゃんもいる。西洋の話が好きな方は、生まれてすぐに蛇を退治したギリシャの神、アポロンのことなど思い浮かべて下さるといいだろう。

キリクの生まれたのは、アフリカの村である。本来なら、恵まれた自然のなかで村人たちは暮らしているはずだったが、魔女カラバが近くに住みつき、その呪いによって、泉の水は涸れる。男たちは魔女に戦いを挑んですべて彼女に喰われてしまっている、という大変な状況である。

キリクは皆に比べて特別に小さく、赤ん坊のくせに、事情を知るや否や、魔女と戦おうとする。そんなに小さい子が、というよりは、物語に詳しい人は、日本の一寸法師や、西洋の親指太郎のことを思い出されることだろう。確かに英雄は普通であっては駄目で、逆説のなかに生きていないといけない。小よく大を制するのである。というよりは、小だからこそ、子どもだからこそ魔女に立ち向かってゆけるのだ。大きい大人たちは皆、魔女に負けてしまったのだ。

ところで、魔女のカラバは、キリクとは対照的である。大きくて、着飾って、その上、沢山の部下を引きつれている。そして、この部下が特徴的なのは、まさに近代的装備をほどこされていることである。見張りにしろ、探索にしろ、攻撃にしろ、まったく近代兵器そのままだ。地中に隠している黄金はすぐに探し出す、火炎放射器で家は焼きつくす。そして、それらを遠隔操作するカラバは、自分の敵に接触することもない。

何だか、これとほとんど類似のことが現実に最近起こったではないかと言いたくなるが、カラバは「悪者」で、徹底的にやられている方が「善人」である。こんなのを見ていると、最近、近代兵器で徹底的に勝った方が「魔女」の軍団だったのか、などと思いそうになるのだ。

それはともかく、キリクの知恵と活躍で、男の大人で唯一残っていたキリクの叔父さんや、他の子どもたちが魔女にやられるのを何とか防ぐことはできた。しかし、魔女を退治することはできない。

カラバの呪いによって、涸れてしまった泉を、キリクは調べているうちに、実はこれは何もカラバのせいではなく、まったく異なる原因であることがわかり、キリクの知恵と勇気で、泉は復活する。この話は映画を観られるときの楽しみのため省略する。

村人たちは大喜びをするが、キリクは泉の源泉の洞穴のなかで水に溺れて死んでしまう。一同悲しんでいるうちに、キリクの母は彼を抱きしめ、水を吐かせ、村人たちの必死の願いのなかで、キリクは奇跡的に息を吹きかえす。

ここのところは、実に大切だ。キリクは生まれたときから「自立」していた、と述べた。しかし、それは仮のものなのだ。人間がほんとうに強くなるためには、母親にしっかりと抱かれる体験をしなくてはならない。洞穴の中の水に溺れていたキリクは、言うなれば、大地の母の子宮の羊水のなかにいて、ここで再び誕生してきたのである。母親に抱かれ、母なる大地に抱かれ、村人に見守られ、キリクは、これまでとは異なる強さをもつことになる。

このような体験の裏づけのない「自立」は、見せかけのものであり、「孤立」になってしまうのだ。他とつながりつつ自立することが大切である。

ここで、キリクは従来の英雄、母から完全に自立し、悪者と戦い、完全な勝利を収める、というのとは異なる英雄として再生したのだ。この新しい英雄は、悪者のカラバと戦う前に、まず、「なぜ魔女カラバは意地悪なのか?」ということをあくまでも追求しようとする。彼は戦う前に考える。しかし、その答を見出すためには、深い知恵が必要なのだ。その知恵は、「お山の賢者」である、彼のおじいさんが持っている。

1998年／フランス映画／74分／ドルビーSR／ビスタサイズ　http://www.albatros-film.com

8／9（土）よりロードショー!!

（上映終了日は劇場までお問合せください）

日本語吹き替え版				字幕版
11：30	1：10	2：50	4：30	6：20

＊各回入替制／途中入場はご遠慮ください
＊毎土・日・水曜日、祝日および8／9（土）～8／17（金）は混雑状況にかかわらず整理券を発行します

特別鑑賞券1500円（当日一般1800円の処）**好評発売中！**

劇場窓口、チケットぴあ、ローソンチケット、各主要プレイガイドにて発売中
※劇場窓口にてお買い上げの方には、≪特製の笛≫をプレゼント（限定数）

梅田スカイビル（空中庭園）タワーイースト4F
梅田ガーデンシネマ
tel：06（6440）5977　www.cineplex.co.jp